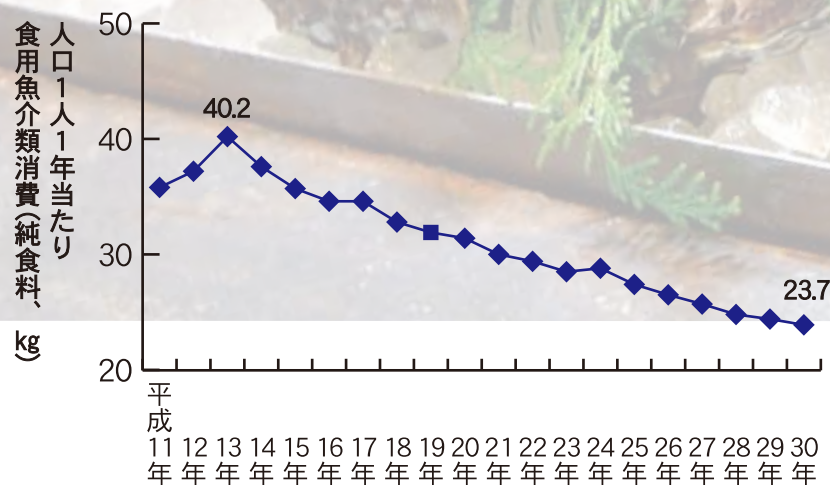


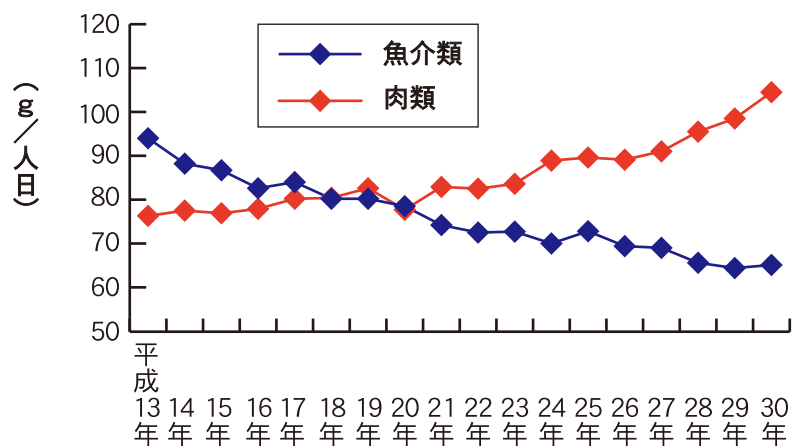


〈図1〉食用魚介類の人口1人当たり消費量の推移



資料：農林水産省「食料需給表」

〈図2〉国民1人1日当たりの魚介類と肉類の摂取量の推移



資料：厚生労働省「国民栄養調査」(平成13~14年)
「国民健康・栄養調査報告」(平成15~30年)

つし選択肢の一つとなりました。また、人口の減少や核家族化が進み、かつてのように家庭で食べる魚の量自体が減少したことも要因として挙げられます。このようにさまざまな要因が複合的に重なり合い、魚離れが起こっていると考えられます。そしてそれは、私たちの住む枕崎でも同じことが言えるはずで

す。このような魚離れが進む昨今、地元の漁業関係者の中では魚への思いや後継者不足の問題、不安や可能性の模索など、さまざまな思いがあふれていました。

告(厚生労働省公表)においても、魚介類の摂取量の減少が示されています。逆に、肉類の摂取量については増加傾向にあり、平成18年には魚介類と肉類の1日当たりの摂取量が逆転し、その差は年々拡大傾向にあります(図2参照)。さらに、さまざまな年代で魚介類の摂取量は減少傾向にあることも示されています。

日本は四方を海に囲まれ、昔から魚や貝を獲って食べるなど、海の恵みを受けてきました。しかし、時代が進むにつれ、洋食が家庭に入っていく、魚より肉が食べられるようになりました。さらに時代は進み、現在ではスーパーマーケットやコンビニエンスストアで弁当や冷凍食品、インスタント食品などを手軽に購入できる時代。ひと昔前までは食卓の中心にあった魚は、い

減り続ける魚の消費量

農林水産省が公表している食料需給表によると、1人当たりの魚介類の年間消費量は、平成13年の40・2kgをピークに、年々減少傾向にあります。平成30年は23・7kgで、平成13年のピーク時と比較すると約4割減少しました(図1参照)。

魚離れの要因

統計データで見ると、全国的に魚離れが起こっていることが確認できます。

なぜこのような魚離れが起こっているのでしょうか。その要因は、さまざまなものが考えられます。

薩摩半島の南西部に位置し、東シナ海に面する枕崎市。年間を通してさまざまな種類の魚が水揚げされ、港から直送された新鮮な魚を食べることが出来ます。しかし、近年では「魚離れ」という言葉があるように、魚の消費量は減少傾向にあります。最近魚を食べていないという方も多いのではないのでしょうか。今回の特集では、地元の漁業関係者などを取材しました。私たちが口にする魚には、いろいろな方のさまざまな思いが込められていました。